

## ・はじめに

今回の調査区は平城宮の東に位置し、現在覆屋による野外展示・基壇復元整備が行われている内裏東方官衙の東にあたる。調査区の西は昭和40年に調査が行われ、出土木簡より造酒司と推定されており、今回の調査でも造酒司関係の遺構が検出されると考えられた。その結果今回新たに検出された遺構は、建物8棟・塀もしくは柵3条・井戸1基である。なお、調査は本年10月1日より開始し現在も継続中である。調査面積は東西20m南北70m、1400m<sup>2</sup>である。

## ・遺構の変遷

22次調査の成果を含めた遺構の変遷は、以下の3時期にわけられる。

## 奈良時代の前期

この時期には井戸屋形を持つ井戸（井戸16）がつくられそのまわりに建物01・建物12・建物17の3棟が点在し、井戸と建物12の間は南北の塀で仕切られる。（塀22）また西の官衙地区は掘立柱塀によって区画されるが、その東では明確な区画施設は検出されておらず、造酒司として区画されていたかどうかは不明である。

## 奈良時代の後期

この地区が最も整備される時期である。前半にあった井戸（井戸16）の東に井戸16と同様に井戸屋形を持った井戸（井戸15）がつくられ、その東にめかくし塀（塀23）がたてられる。そして井戸の北東には建物08・建物09と周りを溝で囲まれた建物（建物06）が、東には南北に廂をもった建物（建物05）が建てられる。井戸の東南には南北棟（建物13）が、更にL字型の塀（塀18）に囲まれた一面には南廂をもつ建物が建てられる。

また北は築地塀（塀20）で区画され門（門10）が北に開く。西は、西の官衙地区の築地塀に限られるが、東と南は何処まで続くか不明である。

## 奈良時代のおわり

この時期には、発掘区の南辺に井戸がもう1基造られる（井戸26）。なお、この時期まで井戸16が存続していたかどうかは不明であるが、既に廃絶していた可能性もある。建物は新しい井戸（井戸26）を中心に建てられ、酒造りの中

心がこちらへ移ったと考えられる。北方は建物が少なくなり、塀19の北に小さな建物（建物07）が、南に東西棟（建物04）が建てられる。井戸26の北にはコ字型の塀にかこまれて小さな建物（建物14）建てられ、井戸26の東には東西棟（建物02）、西には東西に廂をもつ建物（建物25）が建てられる。そして、建物25から西はL字型の塀（塀24）によって南北に区画される。なお、この時代の建物と塀は、軸が平城方位に対して北で西に振れる。

また、築地塀（塀20）に開く門は1間から2間に作り替えられる（門11）。

## 出土遺物

瓦は築地塀20と建物05の周辺を中心に出土し、年代的には奈良時代中期から後期のものである。土器は北の土壇を中心に奈良時代後期から末期のものが出土したが、奈良時代前半に遡る土器は殆ど見られなかった。

## 遺構の性格

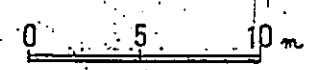
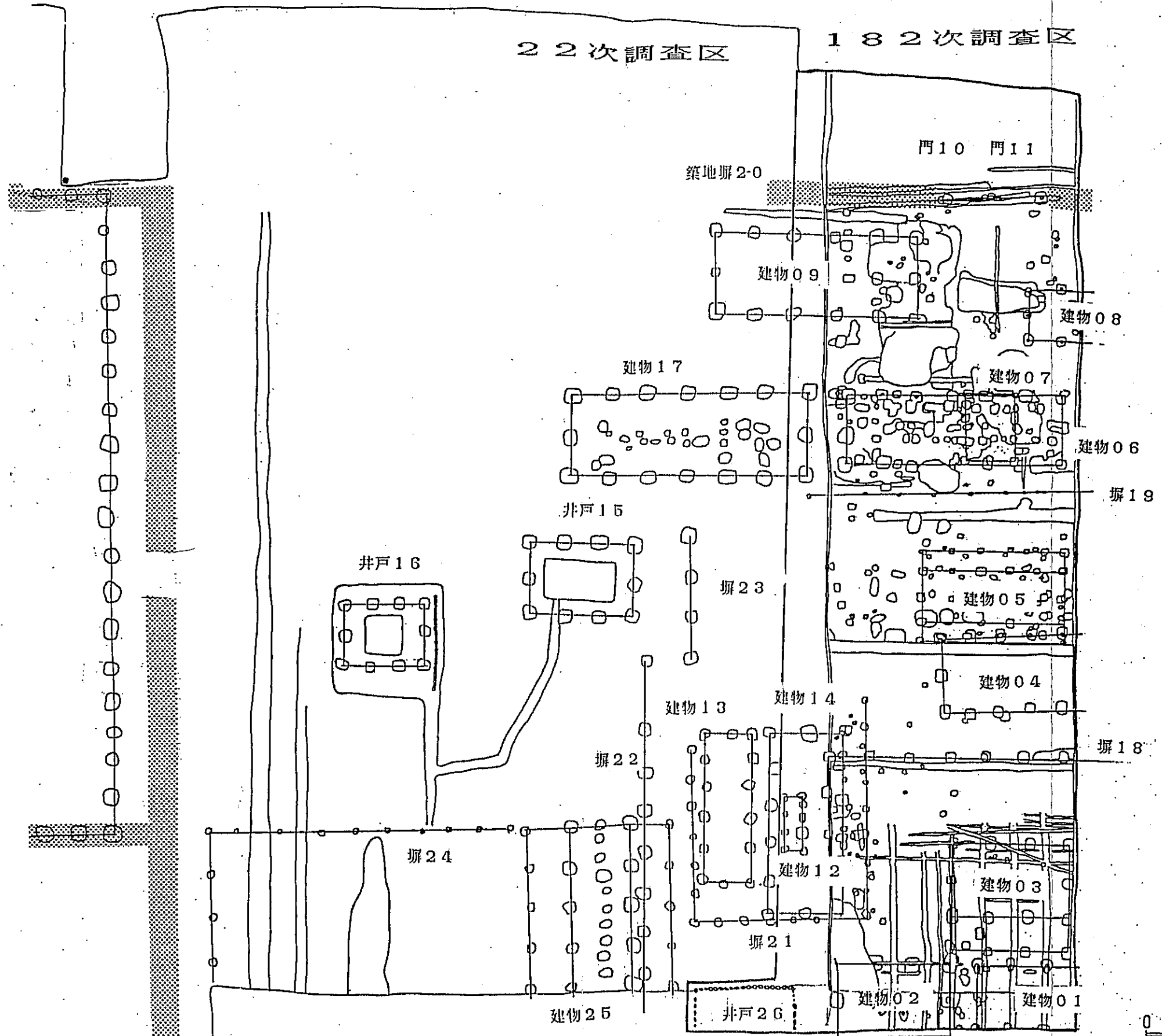
22次発掘調査では、井戸屋形をもつ2基の井戸とそれにともなう建物・塀が検出され、造酒司に関する木簡が出土した。よってこの地区は造酒司と推定される。酒造りに関する遺構としては、22次調査と今回の調査で検出した3基の井戸があげられる。また22次・今回の調査において大型のカメの破片が出土しており、まわりの建物は酒づくりをおこなう建物であったと想像される。しかし各々の建物がどのような機能を果たしたのかは確定できなかった。

## おわりに

今回の調査は造酒司の内部を22次調査に引続き発掘したわけであるが、残念ながら、その機能を把握できる遺構・遺物は検出できなかった。しかし、出土遺物・遺構の変遷から、造酒司は奈良時代の後半に施設の充実がはかられ、東にむかって建物が建てられ、さらに南に井戸が掘られその周りに建物が建てられていったという移り変わりを知り得た。

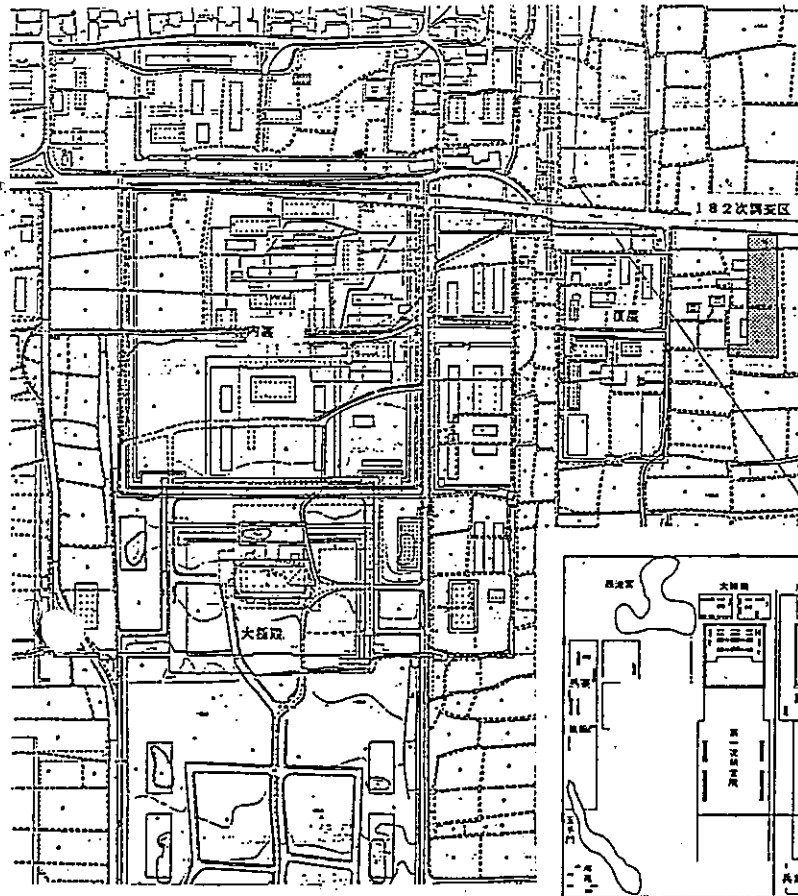
22次調査区

182次調査区



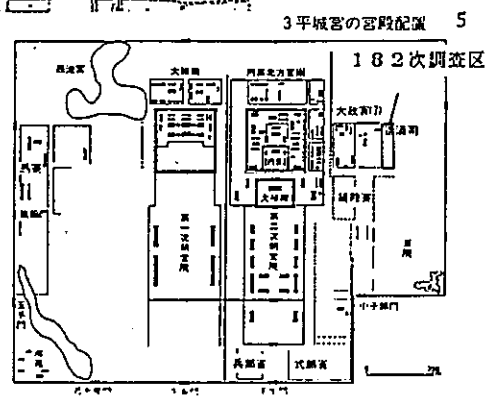
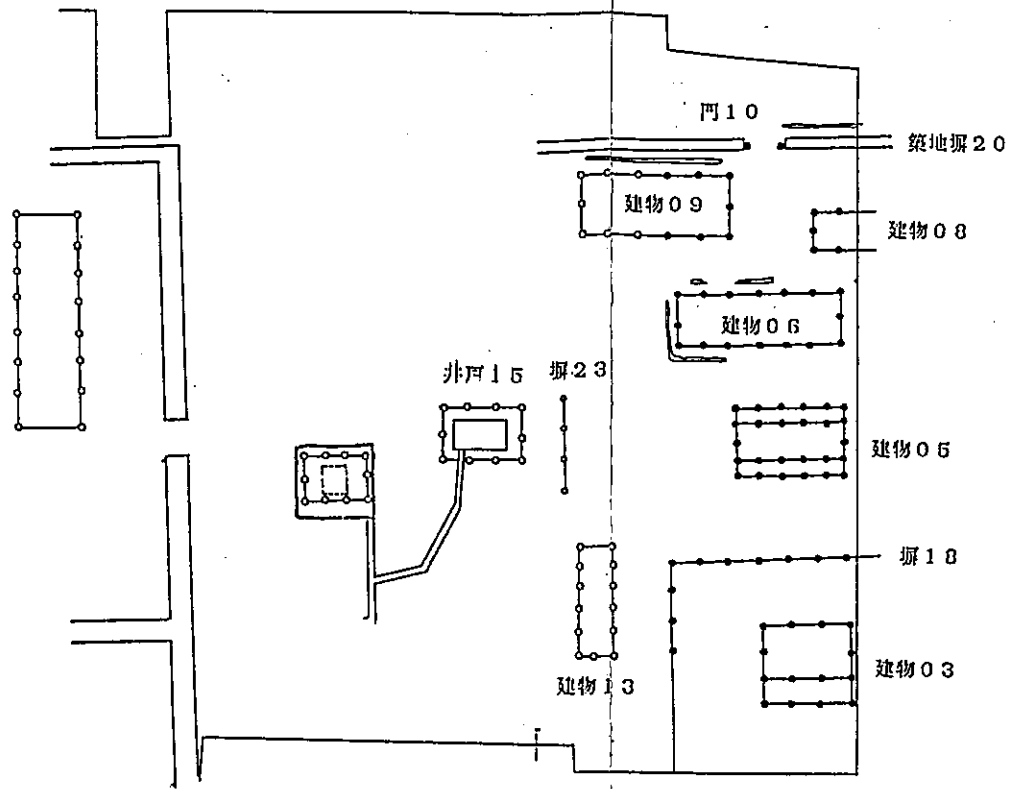
22次調査区

182次調査区



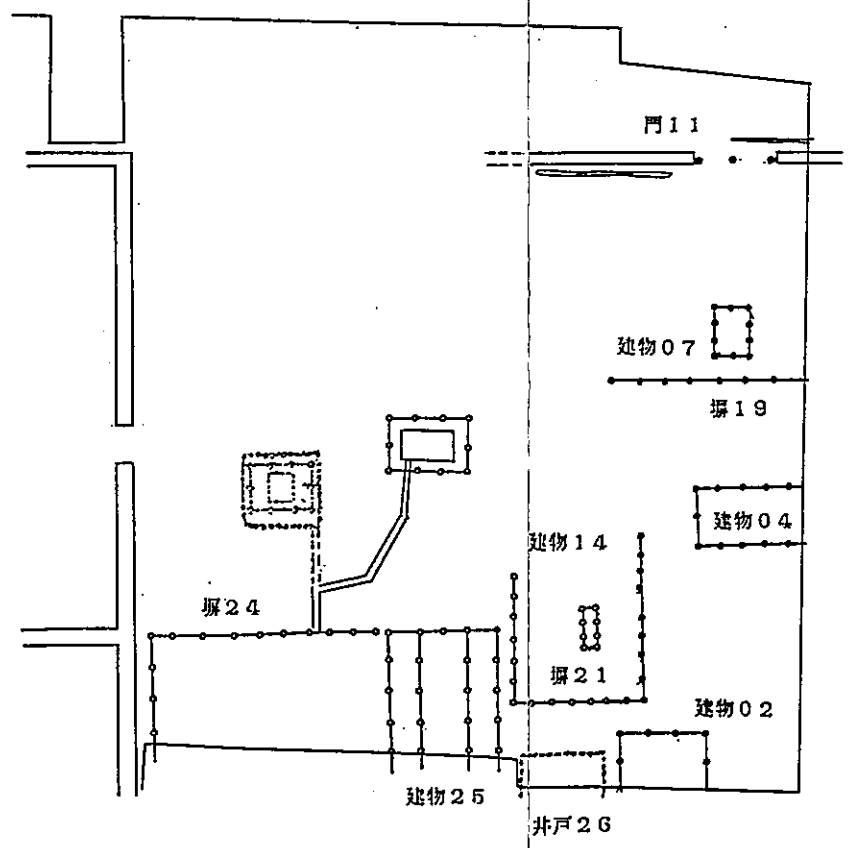
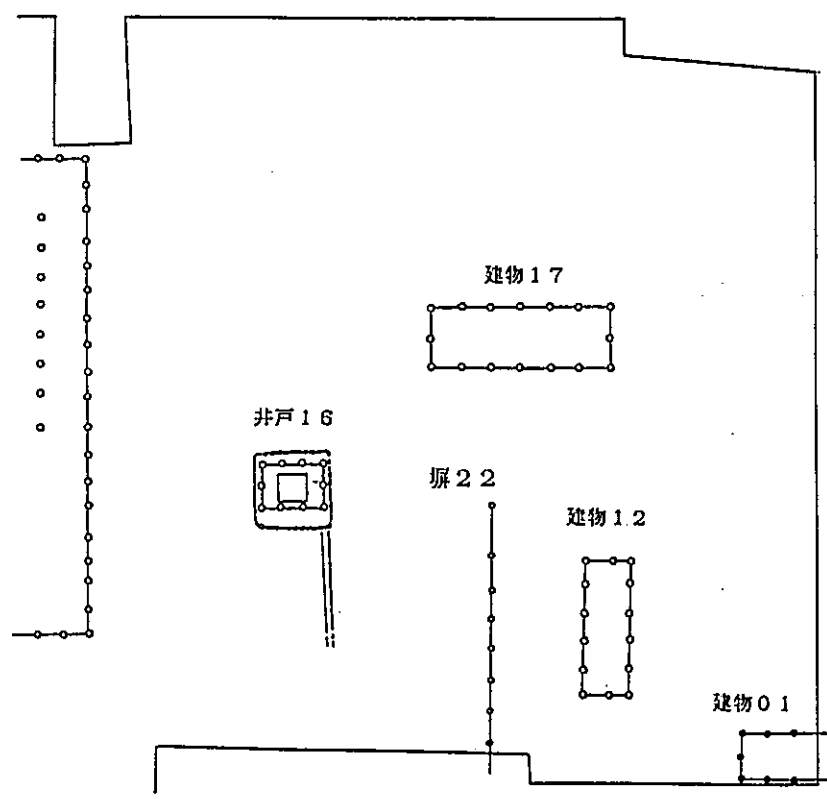
発掘調査  
位置図

遺構変遷図2  
奈良時代後期



遺構変遷図1  
奈良時代前期

遺構変遷図3  
奈良時代おわり



- 22次調査検出遺構
- 82次調査検出遺構